

<子どもと親子のエコ未来賞受賞>

この度、一般社団法人日本伝統野菜推進協会は、環境省が主催する第8回グッドライフアワードにおいて、実行委員会特別賞の<子どもと親子のエコ未来賞>を受賞しました。グッドライフアワードとは、環境と社会により活動を応援するプロジェクトで、社会をよくするSDGsを体現する取組を「環境大臣賞」として幅広く表彰しています。企業、学校、NPO、自治体、地域コミュニティ、個人など、誰でもエントリーすることができます。

当協会の取組みは、あいち在来種保存会をはじめ本当に多くの方々に支えられて活動しています。その方々に何か少しでも報いることができないかと思い、2019年度の活動をもとにエントリーしました。受賞の取組主題は、「伝統野菜の食農教育で創る子ども達の「グッドライフ」な未来」です。環境大臣賞には遠くおよびませんが、当協会の取組みが評価されたことを光栄に思っております。

<子ども達の未来のために>

ボランティアスタッフの方々、協賛企業、あいち在来種保存会の高木先生がたの協力を得て作成した子ども向け農業教育テキスト。そして、田原市や豊橋市の教育委員会に紹介して小学校や学校図書館に寄贈できるよう働きかけてくださった地域の方々。さらに配布を手伝ってくれた生徒の皆さん、子ども達の収穫体験会に、いつも大切な畑を快く提供して下さるハタケタナカの田中先生、本当に、本当にありがとうございます。

また、テキストの配布を契機に「遠いけど、いつでも収穫体験させてあげるよ」と言ってくれる農家の方々や新たに伝統野菜に関心を持ち栽培をはじめた農家の方、農産物を取り扱いたいと声をかけてくださる企業の方も現れ、少しずつですが伝統野菜や在来種の保全が実現してきています。

皆さま、あらためて、心より感謝申し上げます。ありがとうございます。2020年代は、ますます社会的な取組みが必要とされる時代になっていくと思います。そのなかで、子どもたちが環境や農業のことを学べるお手伝いが少しでもできたらと思っています。何とぞ、今後ともご指導ご鞭撻のほど賜りますようよろしくお願い申し上げます。

[https://www.env.go.jp/policy/kihon\\_keikaku/goodlifeaward/](https://www.env.go.jp/policy/kihon_keikaku/goodlifeaward/)

(文/石川哲也)

朝日新聞にて紹介されました！（本文はリンク先よりご覧ください。→朝日新聞デジタル）

<https://www.asahi.com/sp/articles/ASP1G64W9P1DULFA006.html>

朝日新聞デジタル > 記事

全国の伝統野菜を調べた男 突き動かした実家のプリン

会員記事

小出大真 2021年1月31日 6時00分

シェア ツイート ブックマーク メール 印刷

こちらは 2021年2月1日(月)付け朝日新聞夕刊から



「本業」の出張先でも、ついでに直売所などを回る。この日は神奈川県伝統野菜「三浦大根」を見つけた=東京都練馬区





私、大学53期卒業生の石川哲也は、伝統野菜を未来へ残すための活動を行っています。伝統野菜は、各地で古くから栽培されてきた貴重な在来品種ですが、農業人口の減少や栽培の手間等によって減少の一途をたどっています。これらの伝統野菜は、現在の美味しい野菜の育種素材でもあり、農業の技術の育成や地域の食文化を支えてきた野菜たちです。これらは生物なので、もし、絶滅してしまえば復活は困難です。

私は、この伝統野菜を少しでも多くの人に知ってもらい、子ども達のために未来に残していきたいという思いで、2016年7月に一般社団法人日本伝統野菜推進協会を設立しました。

現在、会社役員として、二児の父親として、多忙な毎日を送っていますが、そのかわら、在来種保存会の方やボランティアスタッフと力を合わせ、子ども達を対象とした農業体験会を開催したり、全国の伝統野菜を紹介するホームページを制作したりしています。2019年度には、多くの方の協力のもと、出身地の愛知県で「子ども向けあいちの伝統野菜テキスト」を作成し、田原市、豊橋市の小学校や図書館などに寄贈することができました。今年度も他の自治体への配布を計画しています。

身近な野菜を通じ、多くの人に伝統野菜を知ってもらい、生物多様性の保全や自然環境保護などについて考えてもらえればと思い、この活動を続けています。

皆さんにも、ぜひ、一度ホームページを見ていただけたらと思います。 <https://tradveggie.or.jp/>  
みんなで日本の農業や地域の食文化を応援しよう！

(文/石川哲也)





わたしは、1979年（昭和54年）に日本生命保険相互会社入社したが、二回の出向を経験した。しかし、人生なにがよくてなにが、なにが悪いのか。何が後々幸いするか、わからないものである。むしろ、出向というのはチャンスであると思いつく。大事なのは、出向の辞令・内示を受けた時に、腐らずに前向きに、なにができるのかを考えることである。出向はチャンスである。私は声を大にして言いたい。

第一回目の出向は1989（平成1年）であった。34歳のときで、西大和開発という不動産会社に出向となったのである。その際、腐らずに、会社の制度も利用しながら、仕事とともに自己啓発に努めた。自己啓発は二つあって、一つ目は、専門学校への授業料を半額援助してくれるという日本生命の制度を利用して、不動産鑑定士の試験に受験したことである。苦勞した結果、合格できた。二つ目は、やはり日本生命のトゥゲザー運動という制度に応募して異業種交流会を設立したことである。私のキャリアの中で少し特異なものとなった。この異業種交流会を30年以上続けている。これは、もともと、日本生命の援助もあって、1990年（平成2年）に「関西の今後を考える会」という名前で設立した。私は発起人であるとともに主催者でもある。現在も継続し、開催回数は200回を超えている。

第二回目の出向は、2007年（平成19年）52歳の時であった。公益財団法人大阪日本民芸館に出向し、常務理事・学芸員として勤務した。この時は、前回の出向経験もあり、すぐに切り替えて、学芸員の資格を取るべく通信制の芸術大学に入学した。おかげで、学芸員の資格をとることができ、視野が芸術方面にも拡大して良かったと思っている。

2016年（平成28年）3月、勤務先の日本生命を定年となった。同時に、出向先の公益財団法人大阪日本民芸館も退職となった。大阪日本民芸館の勤務は9年間とながく、退職の挨拶の際、スタッフから感謝状をもらい、不覚にも涙してしまった。

その後、南山大学大学院博士課程後期にすすみ、令和元年3月に柳宗悦研究で博士をとることができた。しかし、勉強ばかりしているわけにはいかない。仕事もしなければならない。今取り組んでいる仕事は、不動産鑑定業である。専門学校へ行って苦勞して平成4年に合格した不動産鑑定士第二次試験を生かすべく、実務修習のため、2016年（平成28年）5月より株三友システムアプライザル大阪支店で働き始めた。若い人に混じって、パソコンの前で鑑定評価実務の仕事をした。勤務は、週2日か3日、目に堪える仕事であった。こうした実務に加え、論文試験と面接試験を突破して、令和2年4月に、最高年齢合格で不動産鑑定士となることができた。博士に加え、不動産鑑定士という二つの「士」を60歳を超えてから獲得したことになる。

最近、民芸や 大阪日本民芸館 万博等のテーマで講演をしながら研究も続けている。

（文／長井誠）



令和2（2020）年度 北大阪ミュージアム・ネットワーク シンポジウム 北大阪のミュージアムで万博を考える

## 大阪でEXPOを考える Ⅲ

—大阪万博50年—

**日時** 2020年9月13日（日）日本万国博覧会閉幕50周年記念日 13:00～16:30

**会場** 国立民族学博物館 第4セミナー室（定員25名） **ZOOM 会場**

**プログラム**

13:00～13:05 開会 あいさつ・趣旨説明  
中牧弘光（収田市立博物館特別館長）

**第一部**

13:05～13:50 基調講演「70大阪万博から25大阪・関西万博へ」  
吉田薫司（国立民族学博物館館長）

13:50～14:10 「『万国博を考える会』について」  
五月女賢司\*（収田市立博物館学芸員）

14:10～14:20 休憩

14:20～14:40 「顕和としてのお祭り広場」  
正木喜壽\*（阪急文化財団学芸課長補佐）

14:40～15:00 「異体美術協会と大阪万博」  
加藤瑞穂\*（大阪大学招へい准教授）

15:00～15:20 「3つの恋しみのパビリオン」  
岡上敏彦\*（元日本万国博覧会記念機構職員）

15:20～15:40 「大阪日本民芸館の創設とその今日的意義 Ⅱ  
—大原総一郎が果たした役割—」  
長井誠\*（元大阪日本民芸館常務理事  
博士（地域研究） 不動産鑑定士  
（株）三友システムアプライザル 鑑定部部長）

15:40～15:50 休憩

15:50～16:30 **第二部**  
\*会場以外からのリモート登壇になります  
パネルディスカッション  
コーディネーター 中牧弘光  
パネリスト  
吉田薫司、五月女賢司\*、正木喜壽\*、加藤瑞穂\*、  
岡上敏彦\*、長井誠\*、橋爪聡也\*（大阪大学教授）

**参加方法**

**会場（定員25名）に参加**  
★往復はがきによる申し込み  
電話番号、氏名（複数人の場合は全員分）を記載し、以下に郵送してください（9/9 必着）。  
〒560-0043 豊中市待兼山町1-1-3  
大阪大学総合学術博物館 万博シンポジウム担当宛

★電子メールによる申し込み  
表題に「万博シンポジウム会場出席」と記載し  
exposympo@museum.osaka-u.ac.jp  
に電子メールで応募してください。

会場参加の場合には、入館にあたって、国立民族学博物館が実施しております新型コロナウイルス感染症拡大防止対策へのご協力をお願いいたします。

**ZOOM 会場（定員90名）に参加**  
表題に「万博シンポジウムZOOM参加」と記載し  
exposympo@museum.osaka-u.ac.jp  
に電子メールで応募してください。  
参加方法は返信にてお知らせします。

応募多数の場合は抽選になります。いただいた連絡先はシンポジウム以外の目的には使用いたしません。

**開催主旨**  
北大阪ミュージアム・ネットワークでは北大阪の地域文化資源の整備、活用につとめ事業展開をはかっております。地域文化資源の1つに1970年に収田市で開催された日本万国博覧会があげられます。北大阪は万博と関係が深い地域であり、開催地でもあります。2020年には万博開催50周年を迎え、2025年大阪・関西万博の開催も決定しました。こうした時期に地元北大阪から1970年の大阪万博に至る歩みを検証いたします。

主催：北大阪ミュージアム・ネットワーク 協力：国立民族学博物館



現職でロボット製品を開発し、日本の市場を開拓し、普及させる業務を任されています。開発というのは自社開発も含まれますが、私はもっぱら英米学科という背景も考慮され、主に海外のロボット製品を視察し、日本市場で普及出来そうなものを発見し、海外企業と日本導入への道筋を交渉し、実際に製品を普及させていく企画業務を行っております。

工場などの専門分野でない市場へのロボットというのは御存知の通り受け入れ側の理解も必要ですし、肝心のロボット自体も発展途上で度々予想外の問題を起こします。日々、新技術の普及に奮闘する毎日ですが、この苦勞が礎となり未来を創っていくのだと信じ、頑張っております。

(文/水谷健吾)

